理研会報

発行　理科研究部
印刷　教研
事務局　〒277 千葉県柏市大字増尾字内田 50番地

"栽培のてびき"ができあがって

研究部長　板橋義夫

ながい間お待たせいたしましたが、この程、研究部員一同の協力により、ようやく完成の運びとなりました。

とぼしい予算で、できるだけ内容のたゞ実したものをと部員一同一年がかりで、それこそ汗水流してつくり上げたもので、体裁はともかく、内容は大変豊富なものと自信をもっておすすめできるものと信じます。

低学年理科の一断面

永治小　鈴木千恵

低学年の理科は、遊びを通して目標を追求させるものが多い。遊びは子どもにとって生活の大部分であり、活発な自発的活動の場であるので、この遊びを効果的に生かして、できるだけ具体的事柄に直接ふれさせ、行動的学習を通して学ばせなくてはならないと思う。しかし、ややもすると、製作したり、遊ぶことだけに学習が流れ、子どもたちは、はっきりした目的も持たずに、自分の気の向くままに終わらせることになってしまうので、遊びによる学習の計画をはっきり立てておかなくてはならない。そして、その中から、子どものすばらしい感動、発見を大切にして生き生きとした授業をしなくてはならないと常に考えている。

一年の教材の"じしゃく"を学習したとき、「小刀も、きっとつくよ。先生」「ついた、ついた」というような子どものねがいにも似た予想と発見した喜び。

「砂場で砂鉄あつめをしよう」

「先生、どうやるの」……網をふくらませて砂の中を旋石でまさぐり、「あっ、黒い物がついてきた」「先生、ぼくのは小さい釘みたいのがついてるよ」「先っぽの方にいっぱいついてるよ」「ああこれが砂鉄というのか」と、期待の満たされた喜びの声をあげる。

低学年では、この感動を大切にしたい。また感動は自然からの感動を受けとるだけでなく、自然への感動も育てることが大切だと考えている。

園・校・学子

穴沢鉦治

沈丁花の赤い蕾が、ポツポツと白い色を加える、思わずすやっとまわりを見廻したくなる季節です。そうです春が来たんです。梅も盛りを過ぎ、寒梅もチラチラ花色を見せはじめると木木の幹も緑のもの、紅のものいっせいに色濃くなりだします。サア先生方、学校園のいそがしい季節がまいりましたよ。会報の編集子もこのところ学校園をお呼びでないようでしたが、こう季節がすすんでくると、又又厳しい注文を寄せてきました。そこで今年も先生方にご活用いただきますようよろしくお願い申し上げ、筆をすすめます。

ずいぶん日がのびたナァ、そうお感じの方はどうぞ花壇に目を転じていただきます。そうなんです二月十九日の雨水を過ぎますと春咲きの花はもうほとんど花蕾を内蔵しています。「ちゆうたい」といいまして意に草丈がのびてくるのです。その時季柳が寒かったり肥料切れになったりしますと栄養失調の花になってしまいます。もう防寒のコモ等は特殊なものを除いてとりはらいます。明るい太陽光線が欲しいのです。そして、ここでの仕事の手始めは除草からはじまります。冬草がのびるのもこことです。大切な肥料をみなもっていかれてしまいます。まだそんなに根を張っていませんからここでぎれいに抜いて下さい。先生の中の雑草も今がチャンスです。花芝の中の小さい緑ですから今なら楽にきれいに除草することができます。二番目には中耕と追肥です。まだ少し寒いのでなかなか中耕はおっくうなものですが植物は根にも新鮮な空気をほしがっています。それに少量の化学肥料を与えましょう。もうそれだけで花は生きかえったように香の盛りには充実した生命を謳歌するでしょう。三番目には移植とせん定です。現丁香の移植は年に三日ともいわれているほどです。白い花びらがポッと見えた日が移植日です。もみじも今が適期。枝の先端をハサミで切って水分が出のようになったらもうだめです。水の出ていないときは良いのです。

バラはせん定、移植共に良い季節です。古いものは思い切って強せん定をしましょう。追肥を忘れずにやっておきます。

草花の類で今からまいても少々花がおそくなるだけで案外きれいな花を晩春に咲かせます。空地にカリホルニアポピーを播せんしておきます。

理科室 (2)

農山小　柏熊寿

○研究部で「植物の栽培手引」をつくるそうな。期して俟つところ多し。

○これは昔ばなし。ヘチマの水をとるのだと、茎を根元から切って、上の方の茎をビンへさしてあったっけ。

○とかく学校の栽培ものはテーマが狂っている。日く「ひかにしたら植物は小さく、みすぼらしく育つだろうか」

○皆の人は言いました。「一の肥しは主人の足跡」

○特に女の先生方よ、大地へハダシで立ってください。そして草木と話してください。彼等が何を求めているかと。

○金魚も朝顔も夏休みが大嫌い。人の生命に比べれば鴻毛の軽きに似たれども、もっと愛情深い世話はできないものか。

○人は人をごまかし得ても、天をごまかすことはできない。やせこけた一輪の花が咲いたら、それがあなたの誠実さの度合いと思って欲り。

○最後に、研究部に一言お願い。実験講習会は夜についたようだが、ここで指導法講習会を計画していただけないか。

蝶にみせられて (2)

朝陽小　今井正臣

十年前ごろから、農業が発達すると共に蝶の数が激減して、私が採集をはじめた時には普通種だったヒオドシチョウ・カラスアゲハ・ミヤマカラスアゲハ・アカシジミ・ウラナミアカシジミ等も数が少なくなり、すっかり姿を消しそうな様子も見られるようになった。さびしいことである。

自分がさんざん採集を楽しみながら、いまさら言えた義理でもないが蝶の保護も考えなければ十年さきの子ども達は昆虫採集を楽しむどころか蝶を見ることさえできなくなると思うようになった。

蝶のふるさとである雑木林がどんどん倒され、家がどんどん建ち赤土がすはだを見せ、田畑ではすみずみまで農薬をまき散らす。こういう人達に少しでも昆虫の知識があり、幼ない時に昆虫採集をして蝶に親しんだ人があったら、もう少し愛情のある方法もとれることだと思う。

これからの昆虫採集は、私が年時代におかしたような、ただ昆虫の数をそろえて自慢するのではなく、自然を愛し、昆虫を愛する心を育てる昆虫採集でなければならないと思う。

秋も深まり、草木も枯れ、蝶どころではないと考えている人がいるかと思いますが、蝶はどっこい生き続けているのです。あたたかい日だまりを選んでじっと成虫で春を待っているのです。何のために、それは、それぞれの生命を子孫にうけつがせる日の忍耐の時期なのです。また、卵やサナギ、幼虫で冬を越す蝶もいるのです。そういう蝶の習性を知るようになると、採集というよりも親身に自然と目が向くようになってくるのです。

私も今では、家や学校の附近を散歩しながら、生き残った蝶の姿を追い、幼虫やサナギを見つけては頭をほころばしているのです。

(編集後記)

○学年末をひかえおいそがしいことと思います

○本号に永治小の鈴木先生のご投稿をのせました。皆様のご投稿をお待ちしております。